

あじさい 紫陽花

第一部の登場人物

大島武男 本編の主人公。軍人を志し陸軍士官学校で学ぶが、訓練中の事故により左下肢を切断、退校し帰郷する。だが志を捨てきれず、志願し、中部第四十部隊に入隊。昭和十九年四月、部隊に比島出動命令が下る。比島で日本軍は現地ゲリラの破壊活動、襲撃に悩まされていた。武男はゲリラ掃討の憲兵隊に配属され狙撃兵となる。彼の正確無比な狙撃はゲリラ、米兵から「プロフェッショナル」とおそれられた。

大島毅 武男の父、少佐。鯖江歩兵第三十六連隊所属。昭和十三年九月、日華事変武漢作戦で壮絶な戦死を遂げる。

大島晶子 武男の母。京都の料亭「にながわ」の娘。

川島倫子 武男の幼馴染。武男を一途に慕う。

川島雄介 倫子の父。

川島久江 倫子の母。

山本幸吉 武男の戦友。

蜷川正造 母方の祖父。京都の料亭「にながわ」の先代。

蜷川征夫 正造の長男。「にながわ」の当主。

蜷川ハル 正造の妻。

大島義忠 父方の祖父。日露戦争、二〇三高地の戦闘で戦死。

大島澄 父方の祖母。父は西南戦争で、夫は日露戦争、息子は日華事変で戦死。

藤田衛 大島毅少佐の陸軍士官学校の後輩。大尉。武男の上官。

チェスター・ニミッツ

アメリカ太平洋艦隊司令長官

ダグラス・マッカーサー

南西太平洋連合軍総司令官。戦後、連合軍最高司令官。

開戦時は比島駐屯の米軍極東司令官（大将）だったが、日本軍の比島進撃で比島から脱出。

登場する地名。軍団名。用語

今立郡神明村 現福井県鯖江市神明町

十六師団 太平洋戦争で比島作戦に参戦し、レイテ島で連合軍と戦うが、壊滅。
師団長 牧野四郎中将は昭和二十年八月十日 自決

鯖江歩兵第三十六連隊 昭和七年から始まる満州事変で出兵。とくに十二年の南京攻略戦、十三年の除州会戦、武漢作戦で多数の死傷者を出す。十五年十月鯖江から新京（満州国首都）に移駐。二十年八月、南大東島守備

隷下	隊の任務で終戦を迎える。
中部第四十部隊	支配下の意 中部第四十部隊は十六師団の支配下にある部隊。野砲部隊。十六師団壊滅後も残存し玉砕には至らなかった。
歩兵第三百三十六連隊	部隊長 近藤喜名男大佐は二十年七月十五日 戦死。
三八式歩兵小銃	鯖江歩兵第三十六連隊が新京に移駐後、鯖江に駐屯した部隊。
九九式小銃	第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて使用された陸軍の主力小銃。口径 6.5mm
九九式軽機関銃	昭和十四年に実戦配備された新式小銃 口径 7.7mm
十四年式拳銃	99 式小銃と並行して開発された軽機関銃 口径 7.7mm
九二式重機関銃	陸軍軍用拳銃。自動式。口径 8mm
陸軍教育総監部	日中戦争（昭和十二年）より実戦配備。口径 7.7mm
現役兵科	陸軍における教育統括機関。所轄学校、陸軍将校の試験、及び部隊の教育を掌った。
国民革命軍	広義には後方職務も含めるが、狭義では直接戦闘に関わる現役軍人を指す。本編では狭義の意味。
八路军	中華民国の国軍。当初は中国共産党の軍隊も加わっていたが戦後分裂した。
陸軍士官学校	日中戦争時、中国東北地方で活動した中国共産党軍。
徴兵検査	陸軍の現役兵科将校を養成する教育機関。予科 2 年本科 3 年で修了。
神明神社	甲、乙・・・現役に適する。丙・・・現役に適しないが国民兵役（国内兵役）に適す。丁・・・兵役に適さず。戊・・・病中病後、その他の事情により判断できず。
烏ヶ森社叢	現在地（鯖江市水落町）に遷座したのは 1129 年。天照大神を祭神とする。
在郷軍人会	鯖江市水落町。敷地五万坪、自然林が生い茂る森。社叢とは神社の森のこと。
国防婦人会	退役軍人によって構成された組織。
営庭	婦人の軍事援護団体。出征兵士の歓送迎、遺族の訪問、防火訓練などをおこなっていた。
	兵営の中の広場

紫陽花 第一部

昭和二十二年一月五日の早朝、今立郡神明村の日野川からほど近い農家の玄関先に、年の頃は三十代前半だろうか、軍服姿の一人の男が立っていた。彼は表札を確かめてから、「おはようございます」と二度三度大声で叫んだ。玄関の板張りの戸が開き、娘が顔をだした。軍服姿の男に一瞬彼女の表情が曇った。不吉な予感に襲われたのである。

「私は山本幸吉という者です。川島倫子さんは御在宅でしょうか」

「川島倫子は私ですが」と答えた倫子の顔がみるみる青ざめた。

「私十六師団隷下、中部第四十部隊に配属され、十九年四月よりレイテ作戦に従軍しておりました。大島武男殿とは中部第四十部隊の同期であります。同期でありますが大島殿は曹長に昇進され憲兵隊に配属されました。レイテ島での激戦はお聞き及びでしょうが想像を絶するものでした。十九年年十月二十日のことでした。米軍は大軍をもってレイテ島に上陸、圧倒的な火力で襲ってきたのです。我が十六師団は必死に応戦しましたが、敵の陸海空の猛攻撃の前に総崩れに至ったのであります。多くの兵士が部隊と運命を共にし、無残にも屍を異境に曝しました。生き残った者はジャングルを彷徨い、マリアに侵された兵士、負傷し歩けぬ兵隊は自決し、さながら生き地獄でした。生き残った兵士も、ある者はゲリラに襲われ死亡、ある者は餓死して果てました。

そのなかにあつて大島曹長殿は戦友を救うことに全力を尽くされました。我々があの地獄から生還できたのはひとえに曹長殿のおかげです」と言い、敬礼の姿勢をとった。

「御苦労さまでした。……」倫子も一礼したのだが、声の震えは止められず、そう言うのがやっとだった。

「大島曹長殿は……」男が言い始めたとき、

「中に入ってもらいなさい」と、中から男の声がした。倫子の父雄介である。

「どうぞお入りください」倫子はさらに引き戸を開いた。幸吉が引き戸をくぐると、そこは六坪ほどの土間である。左側にカマドと水瓶がある。右側には薪と雑木の小枝が積まれ、その横に三尺四方に組まれた木枠があり、中には杉の葉が詰め込まれていた。玄関側の壁には農具、蓑が掛けられている。上がり框の先は十六畳ほどの板の間で、奥まったやや左側に囲炉裏があり、薪が赤々と燃えていた。囲炉裏の五徳には鉄瓶が乗せられており、湯気が立ち込めていた。雄介はその上座で胡坐を組み、そのわきに彼の妻、久江が座っている。上り框から板の間にあがった幸吉はその場で正座し、雄介に向かって深く頭を下げた。久江は杉の小枝を焼ながら、「寒かったです。こちらにこられて暖まってください」と云い、座布団を出した。幸吉は囲炉裏に近寄ったが座布団は辞退し、正座も崩さなかった。彼の態度は倫子をいっそう不安にさせた。彼女は父の後ろに座り、手を握り締めながら俯い

ていた。

雄介が鉄瓶から大振りの湯呑にお湯を注ぎながら、「故郷はどこですか」と尋ねると「静岡です」と答えた。「夜行でこられましたか、遠いところをようこられた。白湯だが飲みなされ」と、幸吉の前に湯呑を差し出した。彼は両手でそれを包み込むようにして手を温め、ゆっくりと白湯を飲み干した。だが、口を開くこともなく囲炉裏の火に視線を落としていた。張りつめた緊張感が辺りに漂った。

何から話すか、幸吉は決めていたが、娘の悲しみを想像すると、切り出す事ができなかったのである。その僅か四、五分の沈黙が、倫子にとって長く耐えがたい苦痛の時間に感じられた。

「あんたが来られた理由はおおよそ見当ついとりますから、包み隠さず話してください」雄介の誘いに、ようやく幸吉は口を開いた。彼は最後に見た武男の様子を報告するために大島家に訪れたのである。

大島武男は大正十年六月八日に父・大島毅と母・晶子の間に生まれた。武男の家は川島家から二百メートルほど離れた小高い丘にある官舎である。父は鯖江歩兵第三十二連隊所属の陸軍中佐であった。父も母も京都の人である。父は陸軍士官学校卒業後、配属先の鯖江歩兵第三十二連隊がある此の地に赴任した。その後、紹介する人があり老舗料亭の娘、蜷川晶子を嫁に向かえた。武男はその一人息子で、父の後を追って軍人の道を志した。

その父は日華事変武漢作戦中の昭和十三年九月に戦死した。武男が十七歳の時で、彼は陸軍予科士官学校の二年生だった。翌年四月、彼は予科課程を終え陸軍士官学校へ進んだ。士官学校で学科、実技ともに優秀な成績を残していたが、とりわけ射撃で天賦の才を発揮した。彼の非凡な才能に注目した教官は、個別カリキュラムを組み、三八式歩兵小銃はもとより、最新式の九九式小銃、九九式軽機関銃、九二式重機関銃、十四年式拳銃の操作訓練を課したのである。彼は才能に加えて弛まぬ努力によって、銃の操作のみならず、構造を理解し、分解・組立ての技術も習得した。実射では極めて高い命中率を示し、教官を驚嘆させた。

順風満帆に見えた。彼の資質は誰もが認めた。知識においても技術、体力においても彼は同期の中でもひとときわ優れていた。加えて義侠心に富み、責任感も強い。同期生はもとより教官からも信頼されていた。

しかし、その責任感が皮肉にも彼の人生を狂わせることになった。

昭和十五年八月五日、武男が士官学校二年生十九歳の時、同期から選抜された二十名が谷川岳での登攀訓練に挑んだ。谷川岳は群馬、新潟県にまたがる標高二千メートルの峻山で、なかでも一ノ倉沢の岩場は国内有数の難所として知られていた。陸軍は南方での山岳戦を想定して、特殊部隊隊員養成の訓練場として一ノ倉沢を選んだのである。険峻な岩場を二

班に分かれて登攀する。武男は第二班の先陣^{せんじん}となった。第一班が岩場に挑み、その後を百メートルほど離れて第二班が登った。第一班が半ばに達したときのことだった。最後尾の男が迂闊^{うかつ}にも浮石^{うきいし}に足を掛けたのである。彼はバランスを崩しながらも岩場の鎖にしがみつき体勢を立て直した。だが浮石は、それは岩に近い大きさなのだが岩場から剥がれ、落下していった。

落下する岩は、岩場で弾み、砕けながら更なる浮石を巻き込みながら第二班へ向かった。「落石だ！伏せろ！」武男が叫んだ。大小さまざまな石が彼を襲った。石から身をかかわすことは可能だが、彼はそうしなかった。先陣が身をかかせば、石は二陣を襲い、二陣が崩れれば、三陣、四陣と崩れ、後続は総崩れとなる。先陣が盾となり、後続の被害を最小限にとどめる。それが先陣に課せられた役割でもあった。

石が彼の肩を直撃する。激痛に耐えながら、それでも体勢を崩さず踏ん張る。鉄兜^{てつかぶと}に直撃する。衝撃^{しょうげき}で目が眩む、それでも耐える。幾つかの石の打撃に耐え、収まったと思った時、こぶし大の岩塊^{がんかい}が大きく弾みながら落下してきた。それは彼への軌道を外れて沢に落下するように見えた。目を離れた瞬間だった。岩塊は岩場の突起^{とつき}に跳ね返されて、彼のこめかみを直撃した。彼は意識を失い急勾配^{きゅうこうばい}の坂を転がり落ち、五十メートルほど下の岩場の窪み^{くぼ}でようやく止まった。だがさらなる不運が襲った。彼が落下する際、岩場の崩落を引き起こしたのである。崩落した岩が彼の左下肢^{さかし}を押しつぶした。その場で応急処置が施され、病院に搬送された。外科医は左下肢切断を宣告した。彼の命を救う選択肢^{せんたくし}はそれ以外なかったのである。

二ヶ月後退院した彼は義足を付けながら懸命に訓練に励んだ。しかし、教官は現役兵科^{げんえきへいか}の訓練は不可能と判断し教育総監部勤務^{きょういくそうかんぶ}を勧めた。彼は断った。文官であることよりも、戦闘員として前線に立つこと、つまり現役兵科^{げんえきへいか}であることを望んだからである。希望は受け入れられず、十六年一月、彼は陸軍士官学校を去った。

武男が現役兵科こだわった理由は父大島毅少佐の生きざまにあった。大島少佐は三十六連隊伝説の軍人である。昭和十三年九月、日華事変・武漢作戦に従軍中、八路軍^{きゅうしゅう}の急襲により部隊は混乱に陥^{おちい}った。彼は陣頭指揮に立って応戦し、敵を撃退した。だが、彼自身は銃弾を受け壮絶な戦死を遂げた。本来指揮官である少佐は後方で作戦指揮するのが常だが、敵の奇襲攻撃により指揮系統^{しきけいとう}が麻痺した。彼は最前線に駆けつけ、応射しながら直接部下に指示を与えていたのである。指揮官は敵の絶好の標的になる。その危険を冒しながら士気を鼓舞^{こぶ}する彼の姿に部下は奮い立ち、敵を撃退^{げきたい}した。部隊の危機を救った彼の行動と死は兵士たちに感銘を与えた。

父の壮絶な死にざまは武男に「軍人の覚悟」を植え付けた。父のようにありたい、その

思いが彼の並み外れた自己鍛錬の源となった。左下肢を失い、義足となった今もその思いが消えることはなく、いっそう戦士の道を求めている。

武男は帰郷して直ちに、歩兵第百三十六連隊（この連隊は鯖江歩兵第三十六連隊が十五年十月満州に移駐した後、鯖江に駐屯した部隊である）に赴き一通の書状を提出した。それには帝国陸軍士官学校の押印があった。彼の卓越した技術を惜しんだ射撃教官が校長に談判して武男に渡した百三十六連隊宛ての射撃教官への推薦状である。異例ではあるが、帝国士官学校長の推薦状である。連隊は彼の射撃技術を検分することになった。武男が三十六連隊伝説の軍人大島毅少佐の子息であることを知った幹部連中の関心をひきつけたことも後押しした。現役兵科を目指す武男にとっても願ってもない機会であった。

紀元節の二月十一日、武男は連隊の射撃訓練場で幹部将校が見守る中、射撃技術を披露することになった。銃は三八式歩兵銃。彼の前に五挺の銃が置かれ、その中から一挺を選ばせた。彼は百メートルの先の的に向かって一発ずつ試射した。いずれも命中したのだが、その中から一挺を選んだ。

射撃は立射、伏射、膝射の基本動作でおこなわれた。距離は百メートル、それぞれ装弾数の五発を発射して命中率をみる。

最初は立射、たちうち。立射は的に向かって、右利きなら左足を前に垂直に立ち、左右の足を真っ直ぐ伸ばし均等に体重をかける姿勢をとる。左下肢が義足の武男は左足を前にするのだが、体重を右足にかけるため、右膝を少し曲げ重心を右腰にのせる構えをとる。三八式小銃の重さは 3.73 kg、熟練者でないかぎり構えるだけで銃身がふらつく。武男の銃は微動すらしない。その構えから引き金を引く。弾丸が発射されても銃身は微動すらしない。銃を支える腕力の強さと衝撃を吸収する筋肉の柔軟性は天性のものだろう。弾丸はすべて中心点に命中していた。百メートル離れた直径五センチの黒点に的中させるには射撃技術に加えて並はずれた視力も必要である。彼は射撃手として必要な資質のすべてを備えていた。

伏射、ねうち。うつ伏せになり両肘で上体を固定させて撃つのだが、これもすべて命中した。膝射、ひざうち。片膝を立てて腰をおろし、そのうゑに肘をのせての射撃。右利きの場合、左下肢が軸足となり左肘を固定させる。だが武男の左下肢は義足で、この構えはとれない。どうするのかと一同固唾を呑んで見守ると、彼は左構えをとったのである。こうすれば右下肢が軸足となり、左下肢が義足である不利は補える。たしかに理屈の上では可能である。だが右射の者が、左射で百メートル先の的に命中させることは不可能に近い。結果はすべての的の中心が打ち抜かれた。この瞬間、どよめきがおこった。

将校の一人が立射で左射をするように言った。武男はいとも簡単にやってのけた。右足に重心をかけ、心もち前傾姿勢をとる。やはりすべてを的中させた。武男に拳銃が渡された。

十四年式拳銃である。彼は弾倉を外し、装弾数を確認し、元に戻した。標的は50メートル先、安全装置を外し、一発一発慎重に狙いを定めて撃つ。右手で4発、左手で4発、すべて命中させた。「まさに神業！」一人がつぶやき、そのあと拍手がおこった。

武男は腕も、腰も、足も、すべての筋肉、眼さえ左右同じように鍛えられていた。彼の父親は「左右両射ができるようにしておけ。戦場で右利き、左利きだという概念は通用しない」と言い、左右両方の筋肉が等しくなるように我が子を鍛えていたのである。戦場で、とくに市街戦では左右両射が出来ることは極めて有利であることを父は知っていた。

武男の採用は即座に決定し、翌日から任務に就いた。義足、十九歳の異色の教官の誕生である。現役兵科に復帰する、その決意が彼の支えとなり、過酷な鍛錬を己に課してきたのである。その努力が報われた。

母、晶子は夫の戦死、頼りとする一人息子が障害者となり士官学校を退学したという事実耐えることができなかつた。前途を悲観して沈み込み、持病の心臓疾患も悪化して寝込んでいたのである。母のためにも彼は強くなる必要があつた。

彼は連隊で射撃指導する傍ら自らの技術も磨き、勤務を終えれば農作業に汗を流した。ひと時も身体を休めることはなかつた。とはいえ自作農地はわずかである。そこで働き手を兵隊にとられた農家の田畑を耕し、力仕事を進んで手伝った。彼は身体鍛錬のためであると言ひ謝礼は断っていたのだが、村人は感謝し、収穫した作物を届けてくれた。

倫子は大正十三年七月十日生まれ、武男より三つ年下で、幼い頃から武男を「大島のお兄ちゃん」と呼んで慕っていた。それがいつしか恋心になつたのだが、それがいつだったか、彼女自身もわからない。武男が陸軍予科士官学校に合格し、東京へ発つた日、十二歳の乙女は淋しさと哀しさに涙を流したのだが、それが幼い恋といえようであろう。武男が予科から本科に移つたその年、十五歳になっていた彼女は父に連れられ神奈川県座間町に行った。座間町には陸軍士官学校がある。日曜日とあつて学生たちは外出が許されていた。再会した武男は三年前の幼さが消え精悍な若者になつていた。その時、武男をはっきりと異性として意識し、惹かれていた自分に気が付いたのである。だが武男にとって倫子は昔のままの倫子であつた。彼女が想いを寄せても武男は振り向かず、遠い存在である。彼は士官学校を卒業して任地に赴きいづれ無縁の人になるだろう。そのことを想像するだけで切なかつた。

武男が士官学校を退学し、義足となつて帰郷したとき、倫子は泣いた。だが、どこかに安堵の気持ちがあつたのも事実である。「あの人はどこにも行かない」と……。さすがに彼の心情を思うと、あからさまに表情には出さなかつたが、前にもまして彼に近づこうとした。

彼の家にも頻繁に訪れて晶子の看病をしていた。武男は彼女のおかげで安心して連隊に勤務し、鍛錬に励み、農作業に汗を流すことができた。

娘の様子を雄介も久江も気づいていたが、黙認していた。彼等も武男に好意を抱いていた。彼等だけでなく、村人たちも足をひきずりながら鋤を振る彼の姿に心をうたれていた。

昭和十七年四月、武男は徴兵検査を受けた。連隊の射撃教官という肩書にもかかわらず判定は丙種、現役には適さずであった。理由は左下肢義足である。もとより結果は分かっていたが屈辱であった。甲種、乙種で合格した若者たちが祝杯を酌み交わしながら氣勢をあげるなか、彼は畑に直行し、黙々と鋤を振っていた。

前年の十二月八日、真珠湾攻撃によって火蓋を切られた太平洋戦争は、二日後のマレー沖海戦でも勝利し、マレー半島上陸、フィリピン空爆、香港上陸とやつぎばやの急襲作戦が成功し、緒戦は日本側に有利に展開した。

歩兵第三百三十六連隊にも出動命令が下り、鯖江駐屯地は僅かばかりの留守部隊が残留するのみで閑散としていた。一方、緒戦の勝利で国内の士気は高まり、やがて町内で盛大な壮行会が催され、同年代の若者が続々入営していった。そんな日、彼は家に閉じこもり、喧騒の収まるのを待っていた。普段は気さくな武男だったが、その日は一日中沈み込み、誰も近づけさせなかった。

母が心臓病を悪化させ他界したのは、十八年の八月三日であった。葬儀のしきたりに戸惑う武男の力になったのが雄介夫妻だった。彼等のごく近い親戚のように振る舞い、葬儀を取り仕切り、倫子もかいがいしく弔問客の応対にあたっていた。その恩義に報いようと、武男は川島家の農作業を手伝った。長男健一を兵隊にとられ、残されたのは老いた雄介夫妻と長女里子、次女倫子だけの一家にとって、それは大いに助かった。

雄介は一人になった武男に川島の家で食事するように勧めた。農作業を手伝ってくれる礼だと言っていたが、彼に好意を寄せている倫子の気持ちを察してのことだった。雄介は娘を武男の嫁にと考えていたのである。武男なら召集されても戦地に行くこともなからろうから、安心して嫁がせられる。実際、妻子を残して外地で戦死、遺骨も遺品も帰らず、渡されるのは一通の戦死公報のみという時代だったのである。

武男は倫子の想いも、雄介の気持ちも察していた。だが彼には戦場に立つという決意がある。川島家の好意を受け入れながらも、距離を保っていた。

その彼に十九年一月四日、彼が二十二歳の時、臨時召集令状（赤紙）がきた。

「到着日時 昭和十九年一月十三日午前八時 召集部隊 中部第四十部隊」

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃と同時にフィリッピン侵攻作戦の火蓋が切られた。十七年五月十日、駐留米軍、フィリッピン国軍は降伏し、戦いは日本軍の勝利で終わった。フィリッピンは日本軍の軍政下におかれたのである。だが、同年六月七日、ミッドウエー海戦で大敗を喫した日本軍は制海権、制空権を米軍に奪われ形勢は逆転した。フィリッピン諸島をはじめ南方諸島に進出した日本軍は米空海軍の空襲、艦砲射撃により苦戦を強いられていた。さらに米軍の攻勢に呼応するように武装を解かれていたフィリッピン軍兵士がゲリラ化し、日本軍への抵抗を強めていった。一方、中国戦線では国民革命軍とゲリラ部隊の八路軍の人海戦術で日本軍は消耗し、泥沼化していった。南方、北支の戦況悪化で死傷者は急増し、兵員不足が顕著となってきたのである。

昭和十八年十月、それまで二十歳から四十歳までが招集対象年齢であったが、兵役法改正により十九歳から四十五歳に拡充され、大学生の兵役免除も廃止された。丙種も召集の対象となった。

その頃になると、戦局の容易ならざることには国民に知れ渡っていた。出征兵士は文字どおり「国家に命を捧げる」覚悟で戦地に赴くのであり、異常ともいえる高揚感とは裏腹に周囲には悲壮感が漂っていた。

「走ることもままならぬ男を兵隊にとるとは・・・、この戦争負けるぞ」そう囁く人間も周囲にいたが、武男は清々しい気持ちで赤紙を眺めていた。「ようやく戦場に立つことができます。立派に働いてみせます」彼は赤紙を父母の位牌の前に置き、手を合わせて誓った。彼は以前より連隊を通して現役志願書を提出しており、今回の兵役改正によってようやく念願がかなったのである。

倫子は不安であった。戦場で足を引きずりながら戦い、生き抜くことは難しい。まして責任感の強い武男である。死を顧みず銃弾に立ち向かうだろう。彼の父と同じように・・・。それは彼女がもっとも恐れる事だった。生きて還って来て欲しい。卑怯であっていい、誹りを受けようとも、何としてでも生きて還って欲しい。

一月十二日、その日は入営前日だった。早朝六時、武男と倫子は神明神社に出向いた。神社は樹齢数百年を超える自然林が生い茂る烏ヶ森社叢のなかにある。巨木に覆われた大鳥居をくぐり、石畳の参道を歩く。彼は右足を力強く踏み出して、左足を引き付けるように歩く。「グッ、サッ・・・、グッ、サア・・・」と。いつもはその独特の足音を聞くと、倫子は心がときめく。だが、今日が最後になるかも知れない。その不安が過ると身体が震えてきた。（そんなことはない、きっとまた逢える、お願い神様・・・）彼女は参道の小雪を踏みしめながら何度も心のなかで呟っていた。

参道の奥の開けた場所に荘厳な拝殿がある。大杉に囲まれ、両脇に阿吽一對の狛犬、背後に十数基の燈籠が並んでいる。玉砂利の広場だが、今日は雪に覆われている。まだ夜明け前で誰もいない。鳥の声もなく、樹木に積もった雪が落下する音だけが時折聞こえる静寂の

世界である。やがて東の空が紅く染まり、太陽が昇る。二人は拝殿にむかって手を合わせた。

「武雄さんが、必ず戻れますように。お願いします、決して死なせないでください」彼女はひたすら祭神に祈った。

武男は招集されたことを祭神に感謝した。軍人を志しながら、その道を断たれたが再び兵卒ではあるが軍務に就ける、その喜びに浸っていた。

神明神社から、菩提寺に向かった。住職には一昨日、出征の報告をした。その際、永代供養と、自分が戦地から戻らない場合、母の十回忌を終えたら廃墓とするように依頼した。今日改めて住職に挨拶をして両親の墓に行く。

一昨日の夜半から朝にかけて一尺ほどの雪が降り、境内から墓地にかけて雪が残っている。ただ、大島家の墓までの道は除雪してあり、その一画は清掃され、墓には花が活けられていた。出征の報告と、挨拶で忙しい武男に代わって、倫子はその仕事を引き受けたのである。

「ありがとう」武男は彼女に頭を下げた。

武男は誓うことも祈ることもなく、ただ心を無にして墓に向かって手をあわせた。

家に戻ると、玄関前には高張り提灯、『祝 入営 大島武男君』と大書きされた幟旗と国旗が掲げられ、紅白の幔幕が張られていた。広間の正面に祭壇が設けられて、天皇陛下と皇后陛下の御真影が飾られていた。その前に白木の三方が置かれ、お神酒、するめ、昆布、勝栗が供えられている。脇に父と母の遺影が掲げられ、花が活けられていた。これらは近郷の有志によって用意されたものである。

倫子が朝食をつくった。セリのお浸し、煮しめ、麩の辛子和え、蕪と薄揚げの味噌汁、タクアンと梅干、白飯、それらはいつもの朝食だが、出立の今日は鱈の一夜干しと彼の好物、卵焼きが添えられていた。彼はお神酒に形ばかりの口をつけ、倫子の給仕で一品々をゆっくり味わいながら食べ終えた。

朝食を終え、武男が玄関に出ると、軍服姿の男たち、彼等は村長、区長、在郷軍人会、青年団の面々であり、割烹着姿の女性は国防婦人会の面々で、日の丸の小旗を手に、見送りのために集まっていた。村長、在郷軍人会会長の勇ましい挨拶の後、振られる小旗の前を通り過ぎると年寄りたちが一団となって集まっていた。武男が手伝った農家の年寄りたちだった。彼女たちの息子や孫は招集され、なかには戦死した者もいた。彼女たちは涙を流しながら駆け寄り、孫のような彼の手を握り、耳元で「命を大切にするんだよ」とささやいた。

武男から十メートルほど離れて倫子が歩いていた。見送りの人が途絶え、二人だけになってもその距離が縮まることも、離れることもなく、無言で駅に向かって歩いていた。鯖江の駅に着き、構内で列車を待っている時だった。

「これを・・・」と言い、倫子が刺し子の袋を渡した。袋の中には無数の結び目のある大ぶりのハンカチが入っていた。千人針のハンカチである。

「ありがとう」武男が微笑むと、「千人じゃないの。私一人だけど」と倫子が恥ずかしそうに言う。「なおさらありがたい。大切にするよ」と、ハンカチを押頂く仕草をした。

「みっちゃん、元気でな」との言葉に、倫子は泣きそうになるのを必死にこらえて、「武男さんも・・・」と言うのがやっとだった。伝えたいことは山ほどあるのに言葉に出せない、俯いたままである。

「大阪行きの列車がまもなく3番線に到着します」駅員の案内の声に武男が改札口にむかった。改札係は「ご武運を祈ります」と言い、敬礼した。

彼が乗った列車が動きだしたとき、倫子は大きく手を振りながら意を決したように叫んだのだが、その声は汽笛にかき消されて武男に届くことはなかった。彼は窓から大きく手を振り倫子に応えた。それが彼女の見た武男の最後の姿であった。

その日の夕方、武男は京都駅に到着した。駅には母方の祖父、^{にながわしやうぞう}蜷川正造が迎えにきていた。正造は寺町の市役所近くで料亭「にながわ」を経営していた。武男の母晶子は正造の長女で次女純代、三女良子、長男征夫と続く。幼い頃、武男は母に連れられて「にながわ」の家によく里帰りをした。正造は職人からは厳しい親方と恐れられていたのだが、孫にはめっぽう甘く、肩車をしながら京都の名所、^{きよみずでら}清水寺、^{ごしよ}御所、^{あらしやま}嵐山などに連れていってくれた。父親に職人として厳しく仕込まれていた征夫は「俺とはずいぶん違うな」と十二歳年下の甥にぼやいていた。

昨年古希を迎えた正造は家督を征夫に譲った。征夫は現在三十四歳である。家督を譲ったものの正造は今でも板場で包丁を握っている。征夫や職人にとっては煙たい存在だが腕は衰えていない。だが正造は職人たちに「技に走るな」と言う。「職人の値打ちは技の優劣で決まる」と教えてきたのは他ならぬ正造である。彼自身、壮年期には技を誇っていた。彼が造る^{ひらめ}鱒の^{うすづく}薄造りは向こう側が透けて見えた。里芋の^{ろっぽう}六方むきなどは^{いさき}聊かの狂いもない。蕪や大根、^{れんこん}蓮根、人参で飾りをこしらえて料理を華やかにする。彼の料理は芸術品とまで称されてきた。

彼が還暦を過ぎた頃から「にながわ」の料理は変わったと言われるようになった。飾りを省き、ごくありふれた料理を大衆料金で提供するようになったのである。

「老舗料亭で秋刀魚の塩焼きだされるとはね」「大根の煮物だされたよ。大根だけだよ」と言う者がいた。しかしそれが不味かったかと聞くと、「美味かった」と言う。戦時中で贅沢な食材が手に入らないという理由だけではない。正造の場合、それ以前からなのである。

「惣菜作るために職人やっているんじゃないよ」と去った弟子もいた。去らないまでも、「親方は技に走るな言われますけど、職人から技とったら何が残ります。いったい親方は

何をおっしゃりたいのですか」と聞く弟子もいた。正造は「自分で考えろ」としか言わず、相変わらず、素朴な料理を出し続けていた。主人が主人なら客も客で、「親父の献立でなくちゃ」との声も多く、客足が落ちるといこともなかったから征夫も職人たちも従わざるを得なかったのである。

「にながわ」は今日を休みとした。店に着くと祖母ハル、征夫夫婦、父方の祖母澄が出迎えた。

澄は七十歳である。旧幕臣の娘で、維新後録を失った父は軍人となった。その父は明治十年の西南戦争、吉治峠の激戦のなか戦死した。澄四歳のときだった。夫義忠も軍人で、日露戦争に従軍し、明治三十七年十二月四日、二〇三高地突撃隊に加わり戦死した。澄三十一歳の時だった。息子の毅も軍人となり、昭和十三年九月、北支戦線で戦死した。澄六十五歳の時だった。軍人の家系に生まれ、覚悟はしてきたつもりであった。夫が戦死した時、彼女は健気に振る舞い、息子も軍人として育て上げた。だが息子の戦死を知らされた時、彼女は人目もはばからず泣いた。その彼女に追い打ちをかけるように、今孫が出征する。義足の身であれば生還も厳しかろう。せめて孫だけは取り上げないで願うのであった。「武男、顔を見せておくれ」と言い、彼の顔をさすった。武男は微笑みながら祖母のなすがままにさせて、彼女が手をおろしたときその手を握り、「必ず帰ってくるから、おばあちゃんも元気でな」と祖母を慰めた。

「大きくなったな」征夫は懐かしそうに言う。彼も大柄な方だが、武男は六尺近い大男である。征夫は武男より十二歳年上で、幼い頃京都に里帰りしたときよく遊んでくれた。一人っ子の武男にとって年の離れた兄のような存在であった。

「その節は大変お世話になりました」武男はあらためて正造、征夫に頭を下げた。父の死後、経済的に援助してくれたのが蜷川の家だった。

「気にするなよ。それよりも武さんこそ大変じゃないか。今夜はゆっくり飲もう。親父がはりきって料理を作ってくれるらしいから」

「武男さん、お疲れでしょう。ゆっくりお風呂に入られてからお食事になさい」ハルが言った。

夕餉となった。最初にだされたのは、菜の花の辛子和え。菜の花をさっと茹で、水気を切り辛子で和えて醤油を垂らす。手間のかからない一品だが、春先には母がよく作ってくれた。次がカワハギの薄造り。最初はもみじおろし（唐辛子入り大根おろし）とポン酢で食す。次は肝の混ぜ込んだ醤油で食せば、いっそう美味である。比較的安価な魚だが、冬場は肝が肥えており、新鮮なカワハギの造りはフグに匹敵すると父は言い、大好物だった。

母は大皿に大根のつまを敷き詰めて大葉を散らし、薄切りの刺身を飾り、肝を添えてくれた。懐かしい料理である。

武男は祖父の心に気がついた。母の手料理を再現しているのだ。三品目はふろふき大根。米のとぎ汁で下茹でした大根を昆布出汁で柔らかく茹であげ、母の場合は柚子味噌ではなく、田楽味噌をのせ白ゴマをふっていた。四品目は野菜の天ぷら。人参と牛蒡のかき揚げに、南瓜と椎茸。母が畑からとってきてよく揚げてくれた。

次は鰯の塩焼き。安価な魚で大島家の食卓にもよく登場した。煮付け、塩焼き、ツミレにして汁物、糠鰯。新鮮なものはヌタ、刺身で登場したが、武男の好みは塩焼き。母は獅子唐辛子の素焼きと柚子、砂糖を加えた梅肉を添えてくれた。六品目は茶碗蒸し。具は一切なし、卵と出汁と塩、薄口醤油のみ。仕上げに薄い葛出汁を張り、ワサビが添えてある。きわめてシンプルな料理だが、それだけに味付け、蒸し加減が大切と母は自慢していた。鶏は大島家でも飼っており、卵料理を母は得意にしていた。

最後はワカメと揚げ玉の味噌汁。揚げ玉は天ぷらを揚げる際に出来る副産物である。好みで七味唐辛子を振る。それとタクアン。武男は懐かしさに涙が出そうになった。

贅沢ではないが、武男には何よりの御馳走である。

「これは晶子が嫁にゆくとき教えた料理だよ。他にも教えたが、晶子はこんな料理を出していたのだろうと考えたのさ。気にいったかい」正造が笑った。

母が生きていたら門出に作ってくれた料理である。

「ありがとうございます」彼は正造の気遣いに感謝した。

「戦地からもどったら板場になりな。お前だったら良い板場になれるよ」と正造が言う。

「素人の私にできますか」と武男が言うと、

「板場に大切なのは心根の良さだよ。心根さえ良ければ技は自然とついてくる。だが、その逆はない。技にこだわり、心根をおろそかにする板場が一流になれるわけがない。これは教わるものではない、自分で気づき、身につけるしかない。それができるか否かで天地の差がでるのさ。お前は心根の優しい子だ、心根の強い子だ。きっと一流の板場になれるよ」

「そうしなさいよ、そう、そうしなさいよ」と澄が言った。

「戻ってきたら正造さんに弟子入りして修業しなさい。一人前になって、お嫁さんもらって、子供たくさんつくってね。でも軍人にしちや駄目よ」澄が真顔で言う。

「おばちゃんの言うとおりにするよ」武男は頷きながら笑顔で答えた。そのとき、一瞬倫子の顔が彼の脳裏を過った。

翌日午前七時、武男は伏見深草にある中部第四十部隊練兵場の営門前に立った。すでに数名が到着しており、その後も続々と集まってきた。彼等は前線の兵員不足を補う補充兵で、兵役義務を終えていたが再召集された予備役もいれば、丙種だったが兵役改正で召集された者もいた。年齢も職種もバラバラで、四十代の者もいれば、農夫も教師も僧侶もいた。

なかには弱々しく、兵隊には不向きと思われる者もいた。山本幸吉は旧制中学の理科教師で妻子もいたのだが、今回召集された。年齢は三十一歳である。

昭和十九年一月十三日、中部第四十部隊営門前が大島武男と山本幸吉の最初の出逢^{であ}いだった。彼は入営後、武男と親友になるのだが、営門前で武男について川島家の人々に語った。

ここから山本幸吉の話が始まる。

「大島軍曹殿との最初の出会いは昭和十九年一月十三日、中部第四十部隊の営門前でした。彼は陸軍予科士官学校を卒業しており入隊時から階級は軍曹で、私は旧制中学の理科教師で兵役訓練がない二等兵でした。これまでは兵役免除されていたのですが、戦局悪化によりかり出されたのです。なかには予備役もいたのですが、多くの者が私同様、それまで兵役の対象から外された者たちで、徴兵検査で外された乙種の者もいれば、教師、作家、僧侶、神官^{しんかん}などおおよそ戦争に縁遠^{えんどお}い者、年齢も四十路を超えた者もいて、兵隊として頼りない連中ばかりでした。

多くの者が不安そうに並ぶなか、軍曹殿は直立不動の姿勢を保っていたのですが、彼の左ズボンの膝から下が不自然に細く、義足であることは皆気づいていました。あの身体で・・・哀れと思っていたのですが、それら好奇と同情の視線に動じることもなく、彼は真っ直ぐ前を見つめていました。

定刻の八時に兵事係^{へいじかかり}が現れ、一人々の名前を読み上げました。彼の名前、『福井県今立郡神明村 大島武男』と呼ばれたとき、彼は大声で返事をした後、左足をやや引きずりながら兵事係の前に進みでました。彼が六尺近い巨軀^{きよく}だったことにもありますが、周囲を圧倒する気迫^{きはく}が全身にみなぎっており、痛々しさは微塵^{みじん}も感じさせませんでした。兵事係の横で将校、大尉でしたが点呼を見守っておりました。彼は大島君を見て大きく頷^{うなづ}きました。気迫に満足したのでしょう。彼は大尉にも強烈な印象を与えたのです」

・・・その将校、藤田衛^{まもる}大尉は武男の父、大島毅少佐から陸軍士官学校で指導を受けていた。彼は大島少佐を尊敬しており、少佐の壮絶な戦死によってそれは崇拜^{すうはい}の念に昇華^{しやうか}した。それゆえ、藤田大尉が武男について深い関心を寄せていたことは当然のことであった。武男がそのことを知るのは後のことである・・・

「武男君のそれからのことを話してくれませんか」雄介^きが訊いた。

「大島殿は私の知る限りにおいて最も優れた兵士でした。とくに射撃^{けう}は稀有の天才でした。

狙った的を外す事はまずありません。兵士として優れていただけではなく、彼は若年ながら優れた指揮官でありました。老練な指揮官といえども戦場では冷静さを失い取り乱すこともあるのですが、彼は常に冷静で、窮地に追い込まれても対応を誤ることはなかったのです。彼の適切な判断でどれだけの兵士が命を救われたことか。多くの兵隊が上官の誤った判断、指示で命を失ったことを考えると、大島殿こそ真の軍人、指揮官だったのです」山本幸吉は興奮した面持ちで語り、一息ついた。

「翌日、軍曹殿は藤田大尉に呼び出されました。他に数名の教官が立ち会ったのですが、大尉は軍曹殿に射撃技術を披露するように求めたのです。鯖江連隊から報告が届いていたのです。報告が事実とすれば神業です。彼等は半信半疑で大島殿に実射させたのですが、度肝を抜かれたと、後に藤田大尉は語っています。立ち会った将校が誰ひとりとして目撃したことのない空前絶後の射撃技術だったそうです。

即座に大島軍曹に新兵の射撃訓練係を命じたのです。通常であれば新兵の教育は予備役の一等兵、上等兵である古参兵の役割でしたが、短期間に養成して戦場に送り出す必要があり、軍曹殿に任せたのです。古参兵も指導にあたったのですが、彼等の技術は遠く軍曹殿には及びません。技術の拙さを補うために、彼等は根性論をふりかざし、暴力を振いながら教えていました。そんなことで技術が習得できるわけではなく、理詰めで教えてくれる軍曹殿に教を請う新兵が集まるようになりました。古参兵の面目はまるつぶれです。

大島殿は階級こそ彼らより上でしたが、古参兵をさしおいて、現役経験のない軍曹が新兵の指導することは通常ありえません。古参兵は上層部に不満を述べたのですが、補充兵の出兵は目前に迫っており、彼等の指導方法では到底間に合わない判断し、却下したのです。それが気に障ったのでしょうか。古参兵たちは大島軍曹を目の敵にしていました。

三月下旬頃だったと思います。古参兵の一人が軍曹殿に銃剣術の試合を申し込んだのです。藤田大尉は一応軍曹殿に伝えたのですが断るように助言しました。しかし軍曹殿は笑って応じたのです。

試合場となった営庭には兵隊、将校に加え民間人も観戦に集まりました。古参兵の狙いは衆人環視のなかで軍曹殿を傷めつけて、彼らの威厳を見せることにありました。軍曹殿の射撃技術が優れていることは誰も認めていましたが、銃剣術は敏捷さが求められます。義足である不利は否めません。この試合、古参兵の思惑通りに進むと思われました。

審判の藤田大尉が『一本勝負』と宣言しました。勝負はあっけないほど簡単に決着しました。最初の相手は左右に激しく動き、攪乱させようとしたのですが、軍曹殿は構えを崩さず、飛び込んできた古参兵の胴をいとも簡単に突き上げると、一尺ほど宙に浮き仰向けに転倒しました。

『次』と大尉が声を発しました。相手は背後を突こうと、軍曹殿の周りをグルグル回り始めたのです。軍曹殿は僅かに足の位置を変えただけで常に正対を保っていました。彼の作戦は徒勞に終わり、焦れて打ち込んでいったところ、面を激しく突かれ、崩れるように倒れ込みました。いずれもよほど強い衝撃だったのでしょうか。一人では立ち上がれず、仲間に抱えられてその場を去りました。

『次』との声に三人目が構えたのですが、前のふたりの凄まじい倒され方に恐怖を覚えたのでしょうか。構えたまま、金縛りにあったように一步も動けず、ただ、『やあ、やあ』と声をかけるだけでした。軍曹殿は前に進み、銃剣で相手のそれを激しく打ちました。衝撃に相手は弾かれたように銃剣を落としました。腕が痺れたのでしょうか、拾うことさえできませんでした。

『勝負あり。次は』と大尉が声を掛けたのですが、誰も応えません。『これまで』の声に古参兵たちは営庭を去りました。

面目を失った彼等は、それ以降軍曹殿を避けるようになり、私たちへの暴力もなくなりました。古参兵だけでなく、下士官たちも軍曹殿に一目置くようになったのです。

この時期、つまり十九年三月、南洋諸島の拠点であるマーシャル、ギルバート諸島はすでに米軍に占領されていた。米軍はチェスター・ミニッツ太平洋提督が率いる水陸両用部隊がヤップ、パラオ諸島を目指し、ダグラス・マッカーサー將軍は西南太平洋艦隊を率いてニューギニア島の北岸沿いに西進していた。両面作戦の延長線上に比島がある。米軍の狙いは比島の奪還であった。

その先には、ジャワ、ボルネオ、スマトラ、シンガポール、マレー、仏領インドシナ、タイ、ベトナム、ビルマ、インドがある。これら東南、南アジアの日本の防衛最前線が比島だった。

大本営は次なる主戦場比島に陸軍の主戦力を投入して決戦に備えた。中部第四十部隊にも第16師団の隷下部隊として、比島への移動命令が下されていた。この部隊に召集された補充兵は、新兵も古参兵も比島に送られる日が目前に迫っていたのである。